嚴島神社の舞楽装束

舞楽は５世紀から９世紀にかけて日本にもたらされた外来の舞を伴う音楽で、中国や朝鮮半島、ベトナムなどの音楽舞踊を源流にしたものです。平安時代に公家社会の間で用いられて次第に日本化していった舞楽は、11 世紀の前半になると中国の唐楽を中心とした左方と朝鮮半島の高麗楽を中心とした右方が成立され、舞楽の装束も整備されていきます。

嚴島神社の舞楽は平清盛の時代から始まりました。承安４年（1174）３月の後白河法皇・建春門院を福原に招いた上で随行した参詣や、平家一門の寄進になる承安３年（1173）銘の舞楽面などから嚴島神社において舞楽が盛んに演じられたことが知られています。今日も嚴島神社には二十数曲が伝承されており、2019 年５月に行われた推古天皇祭遥拝式では振鉾、万歳楽、延喜楽、蘭陵王（図１）、納曽利（図２）のような演目が披露されました。

左図１．蘭陵王（裲襠装束、左舞）
右図２．納曽利（裲襠装束、右舞）

舞楽装束は、蘭陵王のように赤と金色（金帯、金色の鉾）を主調とした左舞装束と、納曽利のように青（緑）と銀色（銀帯、銀色の鉾）を主調とした右舞装束に大別され、その中に襲装束、蛮絵装束、裲襠装束、別装束、童装束が含まれます。近年嚴島神社で披露される演目の中には襲装束や裲襠装束を用いた舞が多いです。

嚴島神社の舞楽装束は、中世のものはすでに失われており、伝存する舞楽装束では天正 17 年（1589）銘の童舞の納曽利の袍が最もさかのぼります。これは裲襠の下に着る袍で、右舞の色を表す青系の絹地で仕立てられています。しかし、現在、嚴島神社の舞楽行事で見られる納曽利の装束に注目すると、図２のように裲襠と袴のみが青系の緑色で、袍は赤系の丹色を用いています。通常、舞楽装束は年間 100 回も使う消耗品であるため、近年見られる舞楽装束には刺繍や文様などが簡素化されていますが、服色においても同様の傾向が見られています。

（鄭　銀志）

（「宮島学センター通信」第 11 号・2020 年 3 月）